

共同研究 ● 肉食行為の研究 (2012-2014)

本共同研究に関する最初の民博通信の報告はまだ研究会を一度も実施していない時期のものであり、代表者の問題意識を述べただけであった。2年目にはいった本研究では、これまでに計4回の研究会を実施し、議論の内容にも具体性が出てきたと感じている。第1回目の研究会では、代表者による研究の意図と参加者による議論の見通しを話題にし、第2回目から、参加者の報告と議論を本格的に開始した。

第2回目の研究会では、お決まりの嫌いもあったのだが、「肉食の進化」をテーマにし、五百部裕（梶山女子学園大学）、鵜澤和宏（東亜大学）、池谷和信（国立民族学博物館）の発表をえた。

五百部は人類にもっとも近縁な霊長類であるチンパンジー、ボノボ（ピグミー・チンパンジー）による他の動物の捕獲ならびに採食行動を、池谷は現生の狩猟採集民の狩猟行動と肉食についてアフリカを中心に、鵜澤は肉食が人類の進化に与えた影響について、形態学的、生理学的側面から考えていく内容の発表を行った。

肉食行為の進化史

五百部と池谷の発表の両方をあわせて聞いたことによって明確になったことの1つは、肉食に「味をしめた」人類は、それを反復するようになり、さらにそれを計画的に行われていくことによって、人間が肉食行為にさまざまな意味づけを行う機会が増加していくということであった。

五百部の発表では、チンパンジーが狩猟対象とする動物はアカコロボスの割合が比較的多いものの、その獲得の様子は日和見であり、森林のなかで小型の哺乳動物をつかみ取りするような類いのものであることが示された。他の食糧資源、とりわけ植物資源の獲得量の増減にアカコロボスの狩猟活動が影響するものではないこと等はそれを如実に示すものである。

それに対して、池谷の発表では、現生の狩猟採集民の食肉獲得の手段の多様性、狩猟対象に応じた狩猟技術や方法が異

なることが具体的に示されるとともに、特に興味深いこととして、肉食、肉食+分配、肉食+分配+儀礼という人間側の行為による狩猟対象の分類モデルが示された。肉食のみを目的とする日和見的な獲得行動から、儀礼を見越した文化的な範疇に狩猟活動が組み込まれていく過程は、人類進化史における狩猟行動の動態にほかならない。

鵜澤の発表は、先の2つの発表をうまくつなぐかたちで、先史考古学において、狩猟行動がどのように検証されてきたかを示しながら、人類進化史において肉食が果たした役割を明らかにするものだった。肉食が生態学的な適応をこえて、大脳化を促進し、さらにそれが人類に特有な諸特徴を生みだ

していった過程から、肉食が人類に与えたインパクトがいかに強いものであるかをあらためて理解することができるだろう(図)。

肉食行為の民族誌

第3回の研究会は民族誌からのアプローチをねらいとし、岸上伸啓（国立民族学博物館）、加藤裕美（京都大学）、林耕次（京都大学）に狩猟活動と食肉消費の現在のすがたをフィールド調査の結果をもとにしながら考えていただいた。

岸上の発表では食肉、なかでも鯨肉消費の社会的意味に焦点があてられた。岸上が調査してきたアラスカのイヌピアットの社会ではもちろん貨幣経済が浸透し、一方で、商業捕鯨が制限されてい

るなかで、食肉を売却することはできず、その金銭的な経済価値はそれほど高くない。にもかかわらず、捕鯨が続けられるのは、鯨肉を分配しともに消費することが社会をなたせる原理に関わるからであると結論づけられた。加藤の発表はボルネオのシハンの調査をもとに、個人の肉食とそれに関わる諸属性について考えようとするものであった。集団の文化的、社会的行為としての食肉の分配、共食をふまえたうえで、それを実践する個人がどのような価値観や世界観を有するのかがとらえられており、やはり両氏の発表が連続したことによる効果は高かったと思われる。また、加藤が言及し



人間がつけたカットマークと動物による破碎の順番から、肉へのアプローチの優位性が推定されることもある。(上)石器によるカットマークがつけられた野生ヤギの大腿骨、約5万年前。シリア・デデリエ遺跡出土。(下)穴はワニの歯によると推定されるカバの四肢骨破片、エチオピア更新世の表採資料(提供:鵜澤和宏)。

た食肉とは何かという問題提起からは、(1) 生理学的属性（腐敗しているか否か等）、(2) 認識学的属性（知識、獲得の可否）、(3) 文化的属性（食べない習慣）、(4) 個人的属性（食べたくないという感情等）が、食肉忌避を考えるうえでの一定の整理になりうることが理解できた。これは、今後の研究会でとりあげる予定の肉食忌避を考えるうえで、少なからず有効な作業仮説になるとと思われる。林の発表では食肉のとらえかたを身体感覚との関係でとらえたことが非常に興味深く感じられた。バカ・ピグミーの語彙において、*hute*（空腹）と *pene*（肉に対する空腹）は区別してとらえられていることから、*hute* と *pene* の解消がそれぞれに必要なとなり、分配をとともう食肉の獲得が持続的に行われる仕組みが作られていることが想起された。これは、岸上が示した集団を維持、継続させていく原理を機能させる具体的な1つの形であるだろう。

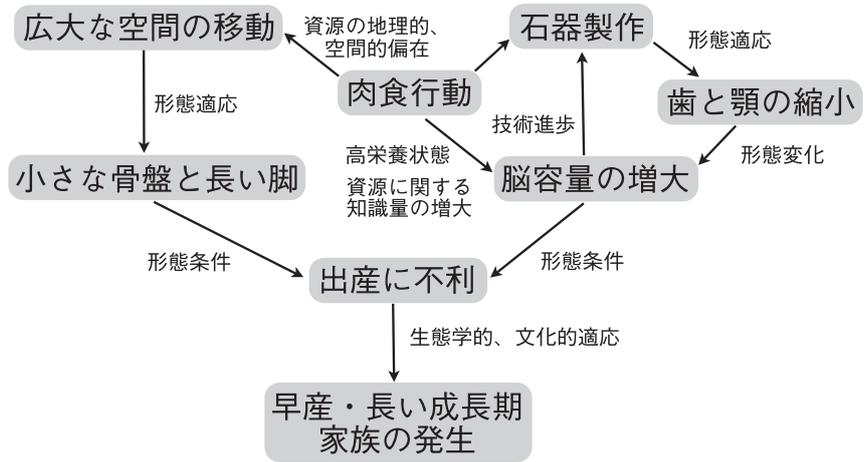
動物供犠と肉食行為

第4回目の研究会は那覇で行った。沖縄における動物供犠の課題を現場で考えることを目標にしたのであった。民族誌や民俗の記録はそれ自体が精確に書かれていたとしても、読み手が現場の様子を知っているか否かで、すいぶんとらえられかたが異なる。この研究会の参加者は全員が必ずしも人類学のフィールドワークを知っているわけではないので、民族誌とそれが現実存在している空間との関係を知ってもらいたいという意図もあった。

発表をお願いしたのは、原田信男（国土館大学）、と特別講師の宮平盛晃（琉球大学）で、沖縄における動物供犠の歴史性と象徴性がとりあげられた。前回までの発表は、狩猟採集経済のなかに存在する食肉の獲得や肉食行為についてのものであり、この回では農耕、定住という経済的、社会的環境下でそれらの課題を考えようとするものである。原田は、ハマエーグトゥとよばれる主として牛を対象とした供犠について、宮平は道切りによく似たシマクサラシとよばれる、集落の境界をつくるための儀礼行為の沖縄における分布や歴史性について詳細なデータをもとにした発表を行った。

それぞれの発表の詳細を紹介するにはとても紙数が足りないが、両氏の発表と現地における実際の儀礼空間ならびに関連資料の実見、またそれまでの研究会での発表と議論を合わせることによって、狩猟採集社会と農耕社会とのあいだでは、肉食行為や動物に対する態度、生命の扱いかたに少なからぬ違いがあることを再認識することになった。これらの課題を議論していくうえで、やはり動物供犠も含めた儀礼行為が鍵を握るのであろう。

狩猟は動物の生命を収奪すること自体を目的とはしていない。一方で、供犠の基本的な目的は、動物の命を奪いそれを神やそれに相当する存在に捧げることである。もちろん、狩猟活動においても、獲得した獲物の肉を儀礼によって神や精霊に捧げることがあるが、この時の食肉は供物としてとらえることはできても、その狩猟行動自体は必ずしも供犠とはされないからである。神や精霊のために動物の命を奪い食肉を



人類進化における肉食行動の位置づけ (鵜澤の発表より野林が作成)

捧げる供犠と、人間の生存に必要な食肉を獲得する狩猟とは基本的には異なる価値体系をもつと言えるだろう。

また、供犠の存在は家畜化にも少なからぬ関わりをもつ。狩猟には成否があり、常に獲物を獲得できるとは限らない。狩猟に失敗して動物の生命を収奪できず、加えて供物となる食肉も無いのでは供犠は成立しない。動物の収奪が必ずしも確実ではない狩猟に頼るのではなく、計画的に動物を屠り、食肉を確保するために家畜を確保するという戦略は理にかなったものである。狩猟採集、牧畜、農耕という人類学が向きあってきた基本的な生業様式の関係をつなぐうえで肉食行為を探究することは一定の意義をもつと思われる。

こうした問題意識のもとで、今後の研究会では、宗教や信仰の場面での肉食行為や食肉の扱われかたに議論をひきつぎながら、肉食忌避の問題を文化的な規定、個人の経験や心理学的な条件、倫理的視点から考えていくことも企図している。

【参考文献】

原田信男・前城直子・宮平盛晃 2012 『捧げられる生命—沖縄の動物供犠—御茶の水書房。
 林 耕次 2010 『バカ・ピグミーのゾウ狩猟』 木村他編 『森棲みの生態誌』 pp. 353-372, 京都大学学術出版会。
 五百部裕 1997 『ヒト上科における狩猟・肉食行動の進化：Pan 属2種の比較を中心に』 『霊長類研究』 13：203-213。
 池谷和信 2009 『狩猟採集民の動物観—ライオン、グムスボック、サル類—』 『ヒトと動物の関係学会誌』 23：27-33。
 加藤裕美 2013 『動物をめぐる知—変わりゆく熱帯林の下で』 (鮫島弘光との共著) 市川他編 『ボルネオの〈里〉の環境学—変貌する熱帯林と先住民の知』 pp. 127-163 昭和堂。
 岸上伸啓 2012 『米国アラスカ州バロウ村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について』 『国立民族学博物館研究報告』 36(2)：147-149。
 鵜澤和宏 1998 『初期人類の肉食行動に関する最近の研究成果』 *Anthropological Science* 106(1)：1-12。
 — 2008 『肉食の変遷』 西本豊弘編 『人と動物の日本史』 pp. 147-175 吉川弘文館。

のばやし あつし

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専門は人類学、民族考古学、人間と動物との関係史。主な調査地は台湾。著書に『イノシシ狩猟の民族考古学』（お茶の水書房 2008年）、共編著に『生業と生産の社会的布置』（岩田書院 2012年）など。